性が高いというご教示を受けた。同氏報文（1996年）によると秋田県よりも古い例がある。宮城県黒川郡大衡村、彦右エ門橋窯跡・SK１（８世紀後葉～９世紀初頭）の例で耳は坏部の体部中位に付いている。いずれも本意遺跡例より後出的な形態であり、８世紀後葉よりも以前と考えられることから、本遺跡例の年代は妥当で、生産地は古い例のある宮城県あたりに求められるのかもしれない。

５．段階の設定と暦年代

ｃ段階：平底坏、沈線が多条化した甕、沈線が多条化し、最大径が胴部上半にある球胴甕

ｂ段階：屈曲部分が凹む（平底に近い）内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある甕

ａ段階：内外面に段（平底気味の丸底）の内弯坏、少ない段状沈線が肩部と口縁部にある甕

ｃ段階は末広遺跡ⅠＨ－47・62と同じ坏・甕・ヘラ切り高台付き須恵器坏を持つ。これら共通点は時間的に近接していることを示しているが、新しい要素だけを拾いあげると外面がミガキで頸部全面を覆う沈線の甕、糸切り須恵器坏がある末広遺跡ⅠＨ－62・47はｃ段階より新しい。ａ段階は末広遺跡ⅠＨ－80と同じ組成（坏・甕）を持つ。ｂ段階は末広遺跡ⅠＨ－31・52とほぼ同じ坏を持つ。

以上より、ａ段階→ｂ段階→ｃ段階という順序が成立する。ａ段階は、内外面に段（平底気味の丸底）の内弯坏があるⅠＨ－80と併行する。ｃ段階は、頸部全面を覆う沈線の伴う甕がある末広遺跡ⅠＨ－62・47よりも若干古い。豊田宏良（1997年）は須恵器との共伴関係より、末広遺跡ⅠＨ－62・47を９世紀前葉、末広遺跡ⅠＨ－11を８世紀中葉と推定している。したがって、ａ～ｃ段階は８世紀後葉～８世紀末の暦年代が与えられる可能性が高い。　（鈴木　信）

４．擦文文化期の墓

(1)　土坑墓について（図Ⅹ－９、表Ⅹ－３）

１．土坑墓の構造など

土坑墓内に骨・歯は遺存していなかった。また、袋状土坑や小柱穴などの付属施設も持っていない。壁は直線的で外傾しながら立ち上がるものが多い。平面形は隅丸長角形（**Ｐ－３・９・12・27**）、小判形（**Ｐ－２・17・29**）、短い小判形（**Ｐ－14・30・31**）、長い小判形（**Ｐ－８・28、Ｘ－１**・Ｇ４）、幅の広い長方形（**Ｘ－１**・Ｇ２）、幅の狭い長方形（**Ｘ－１**・Ｇ１・３）がある。

隅丸長方形・小判形は後北期から続く伝統的な平面形である。長い小判形・長方形は本遺跡例をさかのぼる時期の類例がないのでこの頃に始まる平面形であろう。長い小判形の継続する例として９世紀前半の千歳市末広遺跡（1981年）ⅠＰ－57があり、より長くなった伸展葬墓が擦文文化期中後期

表Ⅹ－３　土坑墓等の分類要素一覧

遺構名	長軸方向（°）	長軸長（cm）	平面形態	副葬品（墓坑内・棺内）	副葬品（墓口脇）
Ｘ－１・Ｇ4	－２２	１１６	長い小判型		
Ｐ－３	＋１２	（１２５）	隅丸長方形	礫（３個）	
Ｘ－２	＋２０	（２３０）	――	小刀	
Ｘ－１・Ｇ1	＋２５	１０８	長方形	頁岩礫	
Ｐ－８	＋２５	１４２	長い小判型		
Ｐ－17	＋３２	９８	小判型		
Ｐ－14	＋３３	１０１	短い小判型		
Ｐ－29	＋４１	９８	小判型	坏・ミニチュア甕	須恵器双耳坏・敲石
Ｐ－28	＋４１	１４１	長い小判型		小型甕・ミニチュア甕
Ｐ－27	＋４５	１４８	隅丸長方形	大型坏・刀子・鉄素材	
Ｘ－１・Ｇ2	＋４６	１０９	長方形		
Ｘ－１・Ｇ3	＋５１	――	長方形		
Ｐ－９	＋５３	１４５	隅丸長方形	手斧・鎌	
Ｐ－30	＋５３	６１	短い小判型	坏	小型甕
Ｐ－31	＋５４	５６	短い小判型		須恵器坏・ミニチュア甕
Ｐ－12	＋６３	（１２０）	隅丸長方形	坏・刀子・斧・鎌	
Ｐ－２	＋６７	（１３２）	小判型		

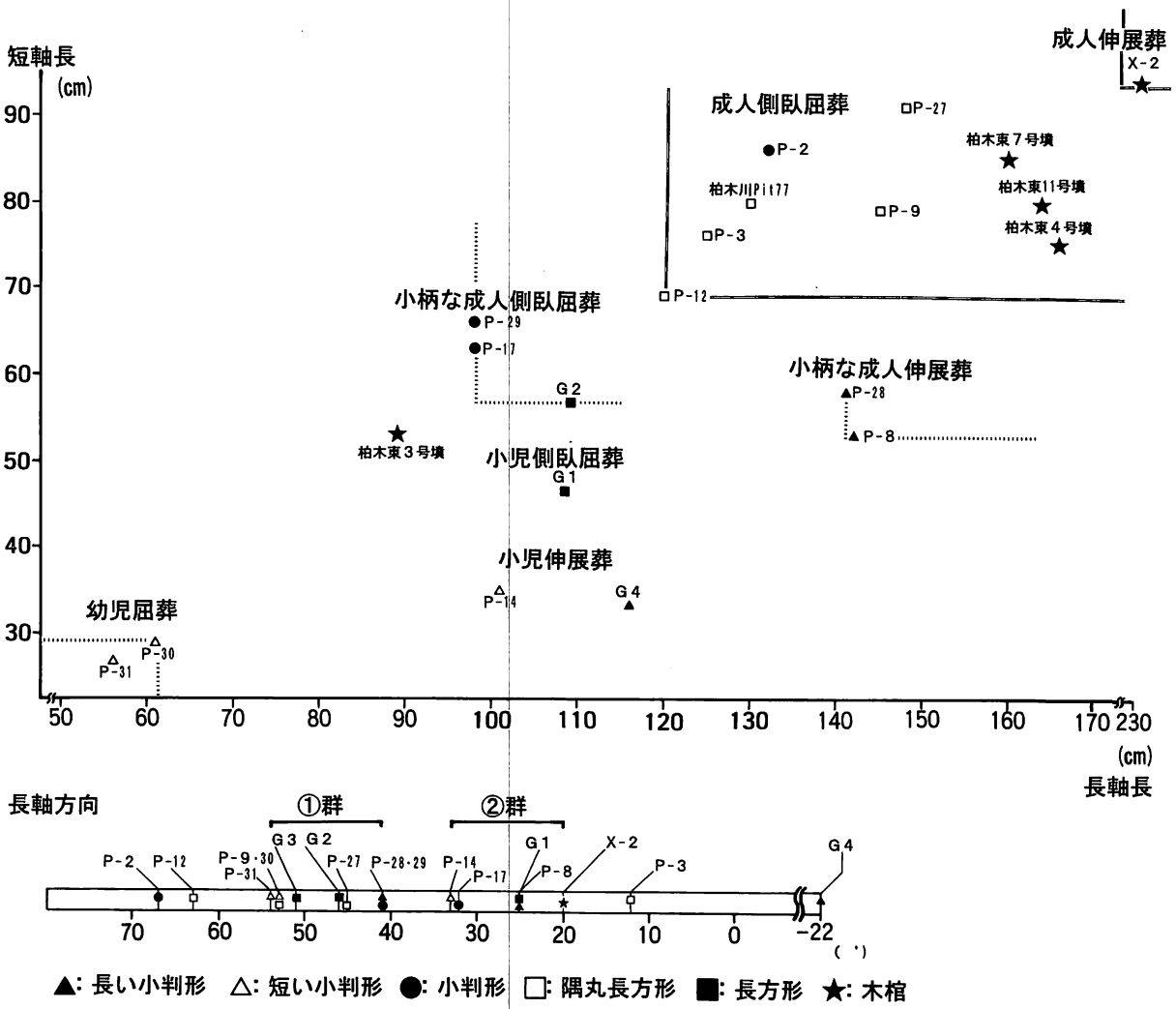
※長軸方向は真北から西に振れるものは正数、東に振れるものは負数で示す。

をへて近世アイヌ文化期に連続している。長方形は**X－1**のみにある。他の土坑墓と系譜が異なる可能性があり、同時期の木棺墓（**X－2**）からの影響が考えられる。より長くなった伸展葬墓が10世紀中葉の森町御幸町遺跡（1984年）Pit 1にあり、引き続いて近世アイヌ文化期に見られる。

土坑墓は壁がほぼ垂直に立ち上がり、付属施設・掘り方が認められなかった。土坑墓は遺体そのものを埋葬する空間であり、再葬がないと仮定すると上端長軸長は遺体の大きさを表していると考えてよいだろう。土坑墓の規模を長軸長でみると56～148cmまでの範囲に収まる。そして56～60cm（Ⅰ群）、98cm（Ⅱ群）、101～132cm（Ⅲ群）、141～148cm（Ⅳ群）の4群に分かれる。小樽市蘭島遺跡D地点（1991年）・千歳市ウサクマイA遺跡（1975年）の遺体が残っている土坑墓の長軸長・短軸長から類推すると、Ⅰ群は幼児、Ⅱ群小児、Ⅲ・Ⅳ群は成人を埋葬したと推定できる。

埋葬姿勢・年齢については、長軸長に短軸長が関係していると考えられる。骨が遺存していないので伏臥か仰臥かは不明である。**P－30・31**は幼児の屈葬、G 1は小児の側臥屈葬、**P－17・29**とG 2は小柄な成人の側臥屈葬、**P－2・3・9・12・27**は成人の側臥屈葬が考えられる。**P－8・14・28**、G 4は短軸が短いので膝を横に倒すことは難しい、**P－8・28**は長軸長が割合長く小柄な成人の伸展葬、**P－14**、G 4は長軸長が短かく小児の伸展葬が推定可能である。

長軸方向の変異は＋67度から－22度まであるが、＋54度から＋20度に集中する。そして＋54度～＋42度の群（①群）と＋33度～＋20度の群（②群）に分かれる。



図Ⅹ－9　土坑墓等の軸長・長軸方向

①群は側臥屈葬（4/8例）が多く、土器を副葬する。②群は伸展葬（2/4）があり、土器を副葬しない。そしてこの群には**X－2**も含まれている。G3・G2（①群）とG1（②群）は切り合いがあり、G3・G2→G1という新旧関係があることから、①群（側臥屈葬が多い群）と②群（伸展葬がある群）とも考えられないこともないが、双方の群に2種類の埋葬姿勢が混在していることを考慮すれば併存しつつ、最後に②群の一部が造墓されたと考えるのが妥当である。

7世紀代の小樽市蘭島遺跡D地点・千歳市ウサクマイA遺跡においては側臥屈葬が主流の埋葬姿勢である。本遺跡は側臥屈葬が多いけれども屈葬がないわけではない。森町御幸町遺跡（1984年）Pit 1は、長軸217cm・短軸120cmの長方形で伸展葬であろうことから、10世紀中葉以前の一時的な流行と推測できる。②群の中に**X－2**があり木棺伸展葬の影響が考えられる。そうだとすると、強度の屈葬ではなく仰臥で立て膝のような伸展葬様の屈葬が想定できる。

2．副葬品

墓口脇にある使用後に底部穿孔された土器の副葬、墓口脇・墓坑内への土器の配置は後北期から続く伝統的な習慣である。本遺跡では墓口脇に副葬する例は幼児・小柄な成人と推定される土坑墓例に集中する。後述する**X－1**・G2の例より、小柄な成人が女性と仮定された場合、幼児・女性の土坑墓は伝統的な習慣を保持していると言える。

土器のなかで特筆すべきは、双耳須恵器坏である。（赤焼き）の双耳坏は後藤遺跡15号墳周溝から1例出土していて、赤褐色土器であること、耳が体部上半についていることから9世紀後葉である。よって、本遺跡例が道内最古となる。村田報文（1996年前出）によると、双耳須恵器坏は城柵（多賀城、伊治城、秋田城、払田柵、志波城など）・官衙とその周辺に多く出土しているので、直接搬入されたとすれば8世紀後葉の城柵・官衙との関係を示唆している。

P－3に礫を副葬する例がある。これは伝統的な習慣で、埋葬姿勢とも相応する。

金属器の副葬は工具と農具であり武具は見られない。側臥屈葬の成人と推定される中で比較的大きな規模を持つ土坑墓に集中する。比較的大きな規模を男性と仮定した場合、工具と農具を保持する役割があったといえる。ただし、小樽市蘭島遺跡D地点（1991年）81－10D土壙のように幼児墓に刀子・錫製環が副葬される例がある。刀子については万能器具的な使用方法が考えられ、十分に供給された場合、年齢によって扱われ方が異なるということはないかもしれない。

(2)　周溝のある墓について（表Ⅹ－4）

「周溝のある墓」に似た遺構として青森、岩手県など東北北部では、「円形周溝」・「環状溝」・「環状遺構」などの名称がつけられている。これらは本来マウンドを持った遺構であるとの見解が主流である。本遺跡の**X－1～3**は墳丘を持っていないので、同じ用語を使用できない。そこで仮りに「周溝のある墓」と呼んでいる。**X－1～3**の類例は現在までのところなく、後藤遺跡、柏木東遺跡、町村農場1遺跡などは何れも墳丘が存在したという。

1．構造について

周溝は長軸長4～5mで馬蹄形を呈する。周溝の途切れる部分は南側にある。周溝の調査が行われた後藤遺跡と比較すると、規模としては中級であり、一般的な長軸長と周溝の形態である。

主体部は**X－1**が土坑墓で、G2・3は構築時に併存し、G1・4は追葬されていた。主体部が多数あることは土坑墓が群を形成することに等しいもので、一主体部一墳丘（一周溝とも言い替えられる。）が原則の北海道式古墳には見られないことである。**X－2**（木棺直葬）には墳丘はないものの、この原則を順守している。

北海道式古墳の祖型がある東北北部においてもほとんどみられない。青森県上北郡下田町、阿光坊

９号墳の１例があり、一見そう見えるが、周溝と主体部のひとつが切り合っており、新たに主体部を構築した際に以前の周溝を利用したと考えた方がよい。よって、元々あった周溝内に新たに主体部を納めるという意図ではないのでＸ－１とは異なる。

Ｘ－２の木棺直葬墓は後藤遺跡15号墳主体部と同じ構造をしている。藤沢　敦（1997年）が「四辺埋め込み式」と分類している主体部構造である。これは、壁付近の壙底面に溝状の掘り込みを入れて、そこに短い板を埋め込み並列させるもので、そのため墓坑底に不連続の溝が残る。Ｘ－２にも長さ10～30cmの不連続の溝が巡る。

天野哲也（1985年）は北海道式古墳の主体部の規格が３種類あることを指摘して埋葬姿勢・年齢にも言及している。その中で最も小さい墓坑を年少者と推定し、つぎのを横臥屈葬かと推定している。

例えば、柏木東遺跡３号墓は私分類でいうと小児の側臥屈葬になり、天野氏の推測に合致する。４・７・11号墓も、私分類でいうと成人側臥屈葬となり、天野氏の推測に合致する。北海道式古墳においては側臥屈葬・伸展葬の２種類の埋葬姿勢があり、柏木東遺跡では側臥屈葬（４/15例）が少なからずある。北海道式古墳の側臥屈葬の墓坑は土坑墓のそれと比べると大きい。遺体のみを埋める空間ではなく副葬品を入れる空間としての意味が加わる。Ｘ－１が側臥屈葬・伸展葬で古い埋葬姿勢が残り、それが土坑墓と近似する。Ｘ－２は伸展葬であり新しい埋葬姿勢で、北海道式古墳と近縁性を持つ。

２．副葬品について

副葬品は、Ｘ－１がＧ１内に礫、周溝・区画域に底部穿孔のない供献土器がある。土坑墓にはない球胴甕の供献がある。礫の副葬はＸ－１・Ｇ１に見られ、柏木東遺跡でも例があり古相を示している。Ｘ－２は墓坑内に小刀、周溝には何もない。Ｘ－１・Ｘ－２ともに副葬品は少なく、内容は土坑墓と比べて変わるところがなく、種・量は土坑墓が豊かである。新しい埋葬方法の採用と副葬品の多寡が相関していない。敢えて推測するなら、伝統的な有力者ではない者が新しい送葬儀礼を導入した可能性がある。唯一性別が推定可能な遺物がＸ－１区画域内から出土した。土製紡錘車である。Ｇ１・４が小児と推定されることから、Ｇ２・３のいずれかが女性となるか。

表Ｘ－４　北海道式古墳との比較

	ﾕｶﾝﾎﾟｼC15遺跡		柏木東遺跡		後藤遺跡		町村農場１遺跡
墳墓の数	3		14		21以上		2
墳丘の有無			あり		あり		あり
周溝の形態	馬蹄形		円・楕円形？		円・楕円・馬蹄形		円形など
主体部の形態	土坑墓	木棺	木棺？		木棺？		不明
主体部の大きさ	小	大	小	大	小	大	大
埋葬姿勢	側屈など	伸展	側屈（大人） 側屈（小児）	伸展（大人）	側屈（大人） 側屈（小児）？）	伸展（大人）	伸展（大人）
主体部副葬品	明らか	明らか	ほぼ明らか	ほぼ明らか	一部明らか	一部明らか	明らか
武具			あり	あり		あり	あり
工具		あり	あり	あり		あり	あり
農具			あり	あり			
装飾品				あり		あり	
その他	あり						あり
土器			あり	あり			あり
周溝の供献品	明らか	明らか	不明	不明	一部明らか	一部明らか	一部明らか
武具						あり	
工具	あり					あり	
農具						あり	
装飾品							
土器	あり					あり	あり
年代	8C後葉～9C初頭		8C後葉～9C前葉		8C後葉～9C後葉		8C末~9C初頭?

武具：太刀、鏃
工具：刀子、斧
紡錘車
砥石
農具：鎌、鋤

※ 伸展は伸展葬、側展は側臥屈葬のことである。明らか・不明とは報告の内容のことである。

X－1は墓坑の平面形・周溝という造墓にかかわる外面的な要素は採用したが、埋葬姿勢や主体部を複数持つ伝統的な要素を保持している。**X－1**が送葬に関わる要素の伝統性の保持するいっぽうで**X－2**は新来の葬法を採用していることは、葬法が漸次的に変容をしていることを示す。

周溝のある墓と土坑墓群は併存しながらも、土坑墓は伝統的様相が濃厚で、**X－2**は対照的に新来の要素が明らかである。**X－1**はその中間的な様相を示している。

3．北海道式古墳との時間的関係

本遺跡における造墓の暦年代は、土坑墓群の土器、**X－1**の土器、**G 1～3**の切り合い関係、土坑墓群の長軸方向、**G 1～3**と**X－2**の長軸方向から、8世紀後葉から9世紀初頭である。

北海道式古墳については資料に偏りはあるが、現段階での暦年代を述べて、本遺跡との比較とする。

後藤遺跡（1981年）は21基が確認されている。長軸方向は2・4・5・14・20号墳が略東→西（開口部）、11・16・17・18・19号墳が略西北西→東南東（開口部）、1・3・6・10・12・13・15・21号墳が略南東→北西（開口部）。少なくとも3群あることから比較的長く造営されたようだ。

坏は私細分のa段階が1点(15号墳)、c段階が2点(3・10号墳)。甕は私細分のa段階が2点(3・5号墳)、c段階が2点（3号墳)。須恵器は秋田城の出土例を参考にすると、9世紀前半となる丸底気味の坏が1点（17号墳)、9世紀後葉となる高台付きの糸切り坏が2点（5・15号墳）と糸切り坏が1点（12号墳)、9世紀後葉となる赤褐色土器双耳坏1点（15号墳）がある。

土器の年代は周溝出土であるが、8世紀後葉～9世紀後葉の幅があり、長軸方向が複数の群をなすことと一致する。恐らく後藤遺跡は8世紀後葉から9世紀後葉にかけて造営されたと考えられる。

柏木東遺跡は河野広道（1934年）・天野（1992年前出）から推定すると、9（1－A）・2・3・7号墳が西北西→東南東（頭位)、4号墳が北→南（頭位)、1号墳が北東→西南（頭位）であり、2群以上が想定される。

土器は後藤寿一・曽根原武保（1934年)、石附喜三男（1972年)、山本哲也（1988年)、天野（1992年前出）に報告されている。坏は私細分のa段階以前1点(9号墳)、甕は私細分のc段階が2点(1・14号墳)。須恵器は秋田城の出土例を参考にすると、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期となる高台付き坏が2点（1・11号墳)、同じ時期くらいの器高の低い坏が1点（11号墳）がある。

土器の年代は8世紀中葉～9世紀前葉の幅があり、長軸方向が複数の群をなす可能性を表している。恐らく柏木東遺跡は8世紀中葉から9世紀前葉にかけて造営されたと考えられる。

町村農場1遺跡は2基あるが長軸方向などの詳細は不明である。山本（1988年前出）がX－G号墳周溝の須恵器を再報告している。それによると、8世紀第4四半期～9世紀第1四半期となる高台付き坏である。古墳もこのころに造営されたのだろう。

以上より、後藤遺跡は8世紀中葉から9世紀後葉、柏木東遺跡は8世紀中葉から9世紀前葉、町村農場1遺跡は8世紀末以降、ユカンボシC15遺跡は8世紀後葉から9世紀初頭に造営されたと考えられ、後藤遺跡の造墓期間が他より長期にわたるが、4遺跡は一時期併行していた。

4．墓群立地と被葬者の村

墓は長都沼に向かって半島状に孤立した微高地に立地する。遺跡内に同時期の竪穴住居跡は存在しない。土坑墓群と周溝のある墓の被葬者は他に求めなければならない。本遺跡から約600m離れた所にユカンボシC 3遺跡がある。この遺跡の土器を実見したところ、**P－27**と同じ形態、胎土を持つ坏やX－1の須恵器坏と同じものを数点確認した。墓群の継続した時期とも一致する。以上のことから被葬者の集落をユカンボシC 3遺跡に求めてもよいと思われる。　（鈴木　信）

3－(1)・(2)の参考文献

江別市教育委員会　『江別太遺跡』(1979年)
江別市教育委員会　「旧豊平河畔遺跡」『元江別遺跡群』(1981年)
高橋正勝　「北海道中央部の続縄文時代」『北海道の研究　1』(1984年)
野村　崇・大島秀俊　「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器(1)」『北海道開拓記念館調査報告　31』(1992年)
深川市教育委員会　『北広里3遺跡』(1994年)
(財)北海道埋蔵文化財センター　『オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』(1995年)

3－(3)・(4)・(5)・(6)の参考文献

フゴッペ洞窟調査団　『フゴッペ洞窟』(1970年)
ワッカオイ調査団　『Wakkaoi　Ⅲ』(1977年)
(財)北海道埋蔵文化財センター　『吉井の沢遺跡』(1981年)
大沼忠春　「後北式土器」『縄文土器大成　3』講談社(1982年)
田才雅彦　「北大式土器」『北奥古代文化　14』(1983年)
札幌市教育委員会　『K135遺跡』(1987年)
北海道大学　『北大構内の遺跡　5』(1987年)
北海道大学　『北大構内の遺跡　6』(1988年)
大沼忠春　「続縄文式土器様式」『縄文土器大観　4』小学館(1989年)
小樽市教育委員会　『蘭島餅屋沢遺跡』(1990年)
千歳市教育委員会　『祝梅山田川遺跡における考古学的調査』(1991年)
野村　崇・大島秀俊　「北海道余市町フゴッペ洞窟出土の土器(1)」『北海道開拓記念館調査報告　31』(1992年)
恵庭市教育委員会　『ユカンボシE9・E3遺跡』(1993年)
上野秀一　「北海道続縄文文化の諸問題」『北日本続縄文文化の実像』(1994年)
(財)北海道埋蔵文化財センター　『オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡』(1995年)
大沼忠春　「8・9世紀の土器－口縁部に沈線のある甕形土器」『蝦夷・律令国家・日本海』　日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編　(1997年)

3－(7)、4の参考文献

後藤寿一　「古墳墓の発掘について」『蝦夷往来　8』(1932年)
河野広道　「北海道の古墳様墳墓について」『考古学雑誌24－2』(1934年)
後藤寿一・曽根原武保　「胆振國千歳郡恵庭村の遺跡について」『考古学雑誌24－2』(1934年)
後藤守一　「北海道における古墳出土遺物の研究　(一)」『考古学雑誌24－2』(1934年)
雄物川町教育委員会　『平鹿郡雄物川町末館窯址発掘調査報告書』(1963年)
北海道文化財保護協会　『柏木川』(1971年)
ウサクマイ遺跡研究会　『烏柵舞』(1975年)
天野哲也　「擦文文化成立における古墳の意義」『考古学研究24－1』(1979年)
江別市教育委員会　「後藤遺跡」『元江別遺跡群』(1981年)
千歳市教育委員会　『末広遺跡における考古学的調査　上・下』(1981・82年)
天野哲也　「擦文社会における金属器の普及量と所有形態」『考古学研究30－1』(1983年)
森町教育委員会　『御幸町』(1984年)
天野哲也　「北海道式古墳再考」『古代文化37－10』(1985年)
山本哲也　「北海道出土の須恵器資料紹介」『うつわ　2』(1988年)
玉川英喜　「岩手県内の円形周溝と方形周溝」『岩手県立埋蔵文化財センター研究紀要　Ⅹ』(1990年)
盛岡市教育委員会　『志波城跡』(1990年)
秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書　Ⅻ』(1991年)
小樽市教育委員会　『蘭島遺跡D地点』(1991年)』
天野哲也　「曽根原武保ノート(前)」『北海道考古学　28』(1992年)
秋田県教育委員会　『秋田ふるさと村(仮称)建設事業にかかわる埋蔵文化財発掘調査報告書』(1992年)
札幌市教育委員会　『K435遺跡』(1993年)
天野哲也　「3　北海道」『古墳時代の研究　13』(1993年)
田才雅彦　「続縄文時代後北期から擦文時代初頭の土壙墓」『21世紀への考古学』雄山閣　(1993年)
伊藤博幸・酒井清治『須恵器集成図録』　雄山閣　(1995年)
宮城県教育委員会　『下草古城跡ほか』(1996年)
村田晃一　「宮城県内の窯情報」『窯研通信　7』(1996年)
神　康夫　「青森県内の円形周溝地名表」『研究紀要　1』青森県埋蔵文化財調査センター　(1996年)
藤沢　敦　「東北北部の末期古墳の主体部構造」『1997年度東北史学大会　研究発表要旨・資料』(1997年)
小松正夫、日野　久、西谷　隆、伊藤武士　「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年(試案)」『蝦夷・律令国家・日本海』　日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編　(1997年)
豊田宏良　「北海道における須恵器の様相」『蝦夷・律令国家・日本海』　日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会編　(1997年)
伊藤武士　「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究　7』(1997年)